こび此上とても侍らじと、打しほれて願ふ心を、桃青もさすがにあはれとや思はれけん、うす紫の短冊に、

子規、鳴や五尺のあやめ草　と書て、汝思へよや、物はしばらくも滯るべからず、滯る時は一念五百生、繫念無量刧の苦み免るべからず。唯何事も五尺のあやめに水をかけ流すが如く、さら〳〵として節なかれとは、連俳の傳にも此を云りと、短冊を取て求馬にあたへ、八千八聲の苦しみを啼ずして、頓悟菩提の雲に入れよと、驚喝を與へらるれば、手を合せ禮拜して、あな嬉し、今は此世の念こそ晴たれと、其儘立て行と見えしが、掻消て姿は見えざりけり。桃青も打おどろき、扨は夢にてや有けん、現にてや有ると、燈をかゝげてあたりを見に、一炷の香煙已に盡て、回向院の鐘の聲に短夜の空のあけ早く、立さわぐ

群鴉の鳴呼とたんずるは、何事にやと立出て、門前の老婆に尋れば、吉岡とかや聞えし美少年の心に叫ぬことの有てか、浮身を隅田の川水に捨たりしが、今朝三つまたの瀨に、あへなき死骸のかゝり侍るとて、人々の見に行て、餘處の袂をしぼり侍るなりと云に、いよ〳〵不思議の思ひをなして、ひそかに長慶寺の選佛場に心計りの菜飯を衆僧に供養して、かれが菩提を弔ふとて、

花あやめ、一夜に枯し求馬かな　とは、此日追福の發句なりしとかや。

才麿楊水諫晋子

我句人しらず、我を啼ものは子規かと、其角が風流日々に變を

好み、心高く行過て、世の人を直下に見下だして、今は俳諧もたのみなしと罵りて、晝夜に新吉原の青樓に遊て、濃紫、上陽など云る花容を愛し、絃歌酒讌し、杯を接へ觴を擧げて、或時は、

蝸牛、酒の肴に這せけり　と酩酊醒る時無、或日は、

曉の反吐は隣か、子規　と吟じて、放蕩無慙なるを、東順も頻に憂ひ思ふと云ども、詮方なく、才丸、楊水等をたのみて、色々と異見を加ふれども、一向に聞も入れず、今時の風流者如何ぞ我が心を知らんや。足下達我が放逸を呵せんと思ひ玉ばば、此句を解て和し玉へ。其和我が心に徹せば、其時俱に俳諧を語るべしと、了髪が持たる團扇を採て書を見れば、

草の戸に我は蓼喰ふ螢かな　と。兩子も各即答にあぐ

んで、其座もしらけて見えけるを、暫く盃に紛らはして、手持なく歸りけるが、此よし東順に語りて、角が放逸今は中々朋友の異見に服すべからずと、彼の蓼螢の句を物語れば、東順も是を聞て、愚子が行過たる、却て諸君を勞しぬと、深く謝してぞ別れける。此時嵐雪は日々深川の庵に來て、秋興の句を談ずる序でに、其角は近頃青樓に而已在て、亂酒放蕩に誇り、一向に諸子の諫を用ひず、父東順もこれを憂侍るなど物語て、此ほどの才丸、楊水等が時宜を述べ、彼の蓼螢の句を

物語るを、

桃青つく〳〵これを聞て曰、あゝ角が向上に迷へるや、二三子の異見を容ざるも、宜なるかな、我誠に此句を和せん、汝一夕吉原に到て、此をあたへなんや。嵐雪曰、願くは高吟を聞ん。桃青曰、事は其臨ひところに感あり、野句此に於て見るべからず、

角と汝と席を對して開くべしと、一紙に認めてこれを封じて與へらるれば、嵐雪拜してこれを受け、大川を渡り、淺草に出、金龍山を過、待乳山を右に見捨て、日本堤にかゝり、衣紋坂より大門口に到れば、其日は七月七日の夕べ、花街の燈籠花を欺き、紅葉を侵て、爛漫たる光りは、天帝釋の羅網に異ならず。火は火に映じて、影かへつて影をてらし、人は人に媚て、唄そぞろに唄をさそふ有樣、誠に喜見不夜城の繁華とも云べく、塵寰にも亦仙家有か、天上若しはこゝなるにや、浮き木の猪牙に棹さして、墨河の源を究め、通客織女が機石を懷にせんと希ふも、げに去ることにこそと感じつゝ、彼の何某が樓に入て、其角や有るとたづぬれば、了鬢が曰、晉子は今三重の臺に在て、上陽人と酒を酌玉へり、君早く登り玉へと。嵐雪即ち臺に上り

て席に入れば、其角は例の半醉の眼とろ〳〵と、上陽が膝によりかゝりながら、雪公來れりと、今日は如何なる高見をか示さるるや、楊公、才公を學び玉ふなと云に、嵐雪が曰、我は足下を說ものに非ず、來て一興を添んが爲なり、今我れ路次に一句を得たり、足下此を和するならば、即ち鯉鱗の興をなさん。其角曰、足下先語れ、嵐雪曰、

我や來ぬ、一夜吉原、天の川、　其角頓に和して曰、

名とりの衣のおもて見よ葛。

又、

顏しらぬ契は草の忍ぶにて、　嵐雪曰、面白し〳〵、我

又其第四を謠はんとて、

冶郎打かたぶける夕露　と吟じて、章を積こと三十六

句に、其角は汝陽が三斗を飲つくして、意氣猶々盛んにして、嵐雪に問て曰、深川の翁如何がおはすや。嵐雪曰、無恙、昨夜杉風と俱に行て、予が、

初秋の心動きぬ、繩すだれ　と云る句を窺しに、彼の六祖惠能の會下にして、風も動かず、旛も動かずと云しに叶て、面白しとの給ふゆゑ、却て翁の初秋の句を乞しに、

初秋や、たゝみながらの蚊やの夜着。　又今日の吟とて、

合歡の木の葉越もいとへ、星の影　と聞えしに、各心を挫かれて、さらに一句を云べくも思はず、日暮の頃歸り侍りしが、杉風は猶跡にのこりて、昨夜の雨を深川に泊りて、遍照、小町が歌を探て、いざ二人寐んと云を題に、

七夕にかさねば疎し、絹合羽　と云る句を得、翁は苦の

衣をわれにと云を題に、

高水に星も旅寐や、石の上　と吟ぜられしよし、今朝杉風に聞、侍りし。角が曰、實に桃青は間然し難き翁なるかな、我も今夕彼の白氏が隣女の題に效うて、

二星私に憾む、隣の娘、年十五。　あるひは宗因が、天にあらばひよこの羽も星のつま　とせしに對して、

地にあらば、れん木賣呼べ、女七夕　と迄は作りしが、合歡の木の葉でしとは、如何にしてか見出されけんと、頻に感ずる折こそよけれと、嵐雪懷より一封をとり出て曰、先に足下蓼螢の吟をなして、才丸、楊水等に見せ玉ひしよし、翁爪かにこれを聞て、名歌に返しなしとは云へども、試に此を和せんと、某に付て一封を寄せ玉へり、足下披き玉へと。其角取て先

づ其上書を見れば、表に角が蓼螢の句を和するとあり。絨をひらきてこれを讀に、からびたる白紙の短冊に、墨の色も薄々と、

朝顔に我は飯喰ふ男かな。　其角

つく〳〵とこれを吟じ返すことあまた度しけるが、忽に起て容を正し、遙に深川の方に向て、稽顙再拜、悚懼恐惶して曰、師翁願くはゆるし玉へ、燕雀の小見眞實の大鵬の高意をしらず、みだりに世人を憤るの心より、科頭にして長松の下に箕踞し、白眼に世間を看他せるを、高致と思ひしが、是かへつて高見にあらず、今日師翁のために諷諫せられて、如何ぞ誤て改めざらんと、衣を振て席を辭し、雪公來り玉へとて、翻然として樓を下りて歸りけるが、それより永く花街の往來をやめて、偏に俳諧に心をゆだね、其冬一部の集を著し、

詩商人、年を貪る酒債かな　と云に、

冬湖日くれて馬に乘する鯉　と翁の脇ありて、兩吟三十六員となし、其外諸子の高吟を選み、檀林の變風を摧て、蕉風の向上を顯し、自ら序して、古人貧交行の詩を嚙で、吐て以爲序。

翻手作雲覆手雨、紛々俳諧何須數、
世不見宗鑑貧時交、此道今人棄如土、

と題し、卷後に翁の跋を乞て、これをみなし栗集と名けて、蕉門數部の魁書とは申けり。

俳諧水滸傳卷之九

蕉翁潛ル水免ニ火災一

栗と呼ぶ一書、其味四つあり、李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る、これに仍て其句見るに遙にして、聞に遠しと、句々を寶鼎龍泉に擬へられし虚粟の集已に成て、四睡の床を吹く嵐も寒き夜に、誰が埋火の炎と立てや、警火の板の音さわがしく、喚鐘の聲耳もとに響て、すはやと云ほどこそあれ、草庵に煙のかゝれば、取るものも取あへず走り出るに、迅風火勢を追て、四面向ふべきところなければ、深川の潮にひたり、水船の蓬をかづきて、煙の中に生のび、夜あけて見れば、數千の民屋は跡もなく、唯焦土の中に殘煙の立のぼるをこそ、ほのかに昨日の

面影とのみ思はれて、面前の轉變に涙を催しながら、先佛頂長老の安否も心元なく、陽岳寺の方に歩み出れば、霜に後るゝ松杉の、葉も殘りなく燒落て、所々に枯れ立たるあはれさ、寺院の跡もそことしも分たねは、行かふ人に其事を尋るに、一人の小沙彌の語て曰、長老は常州より迎の來りて、諸弟と俱に此程鹿島の混本寺へ歸り玉ひたれば、かゝる火災は知り玉はじ、誠に洪福なる大德なりと云を聞に、少しく心の安堵して、げに長老の德の高さ、火宅の宿には住玉はず、大白牛車にうち乘て、妙法の里にぞ遊び玉ふらめと、我が宿業の拙さを觀じて、

兎も角もならでや雪の枯尾花　と打吟じつゝ、汚れし足に草鞋引しめ、濡たる袂をかいしぼりながら、何國をさすとも定めなく、立出んとせらるゝ後より、雪裏の芭蕉いづくへか破

れ飛と呼はる者あり、これ彼の六祖五兵衛なり。桃青も立歸りて、六祖今いづくより來り玉ふや。六祖曰、我此程長老の移轉に隨侍して、常州の方に在しが、故郷より書を傳し故、暫時の暇を給はりて、川船を木瓜より上り、昨夜行德に宿かりて、今日こゝに來て侍るところ、かゝる祝融の災ありと、道にうけ玉はりて、先長慶寺院はいかゞ、且つ桃青の存亡も氣づかはしければと、燒散りたる碎瓦を踏で、かくは馳走し侍るなり。桃青の曰、草庵は一炬の煙とのぼりて、本來の空に歸しぬれども、業身いまだ罪障の厚き故にや、かれと伴ふことを得ず、再び一笠、一節の主じとなりて、何國ともなくさすらへ出侍るなり。六祖曰、足下今何方をさして出玉ふにや。桃青曰、身を風雲の緣に隨へて行に、豈たよるべき定所あらんや。六祖曰、我が郷

甲州は山陰閑寂の地にして、多く俗塵の囂さなし、翁もし來りて籠らんと思ひ玉はば、我と伴ひ行玉はんや。桃青曰、我れもと山林の居をねがひ、且つ甲州に遊ばんことを思ふこと年あり。幸に足下孤獨を憐み玉はば、願くは暫時の浮生を寄せ申んと。それより六祖に伴ひて、彼が所緣の方に立寄、旅裝そこそこに取したゝめ、實世の中は蝸牛の家なさも亦安かりけりと、簑虫の簑を身に引まとひて、蛤の生る甲斐が根を望つゝ、日を歴て甲州に到りしかば、しばらく六祖が後園の草廬に籠りて、此年の冬は送られしとぞ。

梅流掬月惜春色

爰に信州木曾福島の浪人に、河合惣五郎と云る者ありて 同國諏

訪の産にして、本姓は岩浪氏、名は庄右衛門と云しが、福島に勤仕せし時、故有て六祖が娘を嫁せし内縁によりて、浪人の後今の名に改め、夫婦とも六祖の家に食客たるうち、婦は先逝て亡ひて後、惣五郎而已こゝに有て、晝は山野の煙景を翫び、夜は閉窓に書を閲して、出で仕るの志を絶たれば、獨り山家の隱士となりつゝ、語るに友なきを歎きしが、桃青不慮の火難に遇て、六祖が厚き志に誘れて、此冬初てこゝに來られしより、惣五郎は暗に明珠を得たるが如く、悦ぶこと限なく、朝たに、夕部に、膝をならべ、面を對して、求古尋論、散慮逍遙、しばしば語るに、聞に、よろこびに堪へず、桃青の風流を尊で、つひに拜して師弟の約をなし、其身木曾の産たるを以て、其名を河合曾良とぞ名乗ける。

春立て、まだ九日の野山かな　とは桃青の吟ながら、冬往き春來りて、南窓やうやく暖を得ぬれば、六祖或日桃青に語て曰、山中の春色風客の目を悦しむるに足らずと云ども、少しき客愁を慰するものあり。程近き所に、梅林と云所の侍るが、兩山相對して、山腰甚だ梅樹多し。其滿開に至りては、雲をあざむき雪を薫らして、一村馥郁の風に浴す、實に山陰第一の春と云べし。山下の流を瀧津川と云て、これ亦一箇の名川なり。幸に今梅林の花ざかりのよし、守眞志滿、物を逐ば心うつるとは申せども、久しき冬隱りに禪心も欝し王ひなん、少しき眺望も亦憎むべからず。いざ玉へ、行て君復が鶴を養んと、頓て童にわりごさゝえやうのものを取持せ、六祖曾良相隨て、彼の梅林の山下に到れば、誠に六祖が云る如く、花は

白雲に似て山腰をめぐり、川浪は青藍をみなぎらして岩頭にかかり、萬斛の清香鼻をうがちて薫風寒く、あたかも廣寒宮に上るが如くなれば、鳴瀧の秋風を訪し事も思ひ出られて、

梅白し、昨日や鶴を盗れし　と桃青を始め皆々頻りに興を催し、こゝに一樽を傾て、歌をうたひ古詩を吟じて、樂みいまだ央ならざるに、六祖立てかたへを見れば、岩下に住捨たる小庵あり。柴折むすびて、誠に形ばかりの有さまなれば、こは藤房のかくれ家にや、左あらば柱に一首の歌の有ぬべきを、撰集鈔にこそかゝる住居は見置たれと、六祖先づ内に入て、一つの蔕帚の有しを取て、手づから落梅の塵を打拂ひ、桃青を引て内に入れば、

留主に來て、梅さへよその垣根かな　と笑ひ玉ふに、曾

良もこれを見て、

病僧の庭はく梅のさかりかな　と打笑ふに、桃青聞て大に悅び、此ほどの俳談に、早くも正風の趣きを得られしものかなとあるに、六祖はやがて直下の流水に盃を洗んと、石をつたひて汲んとすれば、何やらんきら〳〵ときらめきて、泝る魚のいと面白きを、桃青あれはいかなる魚にやと有れば、六祖が連たる童子、これは瀧津と云ものに侍ると、答るを聞きて、

勢ひあり、氷消ては瀧津魚　と吟じらるれば、六祖、曾良もこれを感じて、各打寄り、枯枝を拾ひては梅林に酒をあたゝめ、花を拂ては石上に句を題する中、ささらぎ十日の月影は、いつしか東嶺をはなれてさし昇り、日は早西岫に打かたふきぬれば、爰に惜む可き興を殘して、歸路の吟、

春もやゝけしきゝ調ふ月と梅。

嵐雪夢母泣蓑虫

兎角して甲斐が根本に有ることも、程なく夏の初めなるに、富士の雪のみつれなきに、彼の西上人の、

時鳥、花橘になりにけり、

梅にかほりし鶯の聲、　此咏や思ひ出られけん、

時鳥、正月は梅の花咲り。　かく吟じて心をなぐさめらるゝ折から、其角が方よりも一聲音信て、江都の人々も待佗び、かつ古郷の伊賀よりも消息のありてなど聞ゆるに、流石に生園もわすれがたく、東武の連衆もなつかしければと、六祖が宿を出んとするに、此ほどの介抱の深切なるも捨がたく、且曾良に

も名殘の惜まれて、必江戸に出給へなど、念頭に契り懇て、

牡丹藥を分て、這出る蜂の名殘かな　と一章を殘して、

杖をたづさへぬ。破れ笠打かたふけて、卯月の末江戸に歸り、

一夜は嵐雪が山伏井戸の柳下に宿して、

卯の花や、暗き柳の及ごし。　一日は其角が茅場町の樹下に臥て、

己が火を樹々の螢や、花の宿。　或は先に在し杉風が別莊にとゞまりては、

宿りせん、藜の杖になる日迄、　と申れし頃よりか、日毎に雨の降つゞきて、彼の蛙飛込むと云し古池も水濁り、

花の雲、鐘は上野か、淺草か　とながめし梢も暗けれど、

さすがに此花の時しり顔なるを、

日の道や、葵かたふく五月雨　と、自在の土釜にしめりし眞柴さしくべて、湯の沸ほどはと、獨座の間をたのしむ手ずさみに、傍に杉風が好みの机の有けるを、筆かみしめて其裏に書玉ふ。其銘に云、

問なる時は、臂をかけて嗒焉吹噓の氣をやしなふ、閑なる時は、書を紐といて聖意賢才の精神を探り、靜なる時は、筆をとりて義之、懷素の方寸に入、たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸、面て二尺、兩脚にあめつちの二つの卦を彫ものにして、潛龍牝馬の眞に習ふ、これを擧て一用とせんや、又二用とせんや。

書畢りて筆をさしおかんとせらるゝ所に、はや嵐蘭が來れば、杉風も入來りて、これを見て一唱三歎、大に翁の高意を感じ、

殊に杉風は風流の寶物を得たりと、悅ぶこと限なし。やゝ有て嵐蘭杉風に語て曰、僕も足下の悅びに少しく劣らざることのあり。昨日市店に如此ものを得て、今翁に看定を願ふなりと、一軸を披き、竿を取てさらゝと柱に掛るを、各さしよりてこれを見れば、一軸に三枚の短冊を貼たり。中央には、

鳳凰も出よ長閑き酉の年。　逍遙とあり、左には、

さて祝へ、武士によき具足餅。　羅山、右には、

梅の花、莟中すといふ字かな。　草山とあり。翁も杉風も手を拍て、珍なるかな、ことわざにも、貞德の風流に富る、門人に羅山、草山有と云へる、大學頭林道春、深草の元政上人、此兩人を左右にして、各春の短冊三片を一軸にしたる、此をこそ風雅の奇寶とは云べきとうらやむに、嵐蘭も悅ぶこと斜な

らず、しからば此軸を主として、近日一席の俳諧を催し侍るべし、杉公も必など契れる折から、門に傘をたゝみ捨て、其角は例の無分別に、門を入るより聲高く、我師々々、をかしき事こそ侍りつれ。此頃七十餘の老醫を、身まかりけるとて、其子弟共のこぞりて泣侍りしが、某に悼の句せよと申侍る。我其老醫のいまそがりし時も、さらに見知りたる人にあらざれば、さして哀にも思ひ寄らず、古來稀なる齡にこそなど云へども、兎角ゆるさず侍るまゝに、

六尺も力落しや、五月雨　と、ものの端にかいつけて與へ侍りぬと語るに、翁も莞爾と咲み玉へば、杉風も嵐蘭も誠に晋子が洒落なる、世に珍らしき悼やと、打笑ふ折しも、嵐雪は手に一枝の榁を持ながら、翁や庵におはすると差し覗くを、其

角は早くも見咎めて、雪中々々、爰を野々宮と思ひ玉ふか、しるしの杉風も居合せたるを、如何にまがへて覗き玉ふぞ、爰こそ浮世を身安す所の隱れ家よと、さし招くに、嵐雪もほゝ咲みながら、いやとよ、これは榊にあらずと、一枝を椽にさし置、這ひのぼりて翁を拜し、三子にも一揖して、扨翁に向て語りけるは、昨夜の夢に、まさしく亡母が來りて、慈訓昔にかはらざりしと見侍りしが、今に俤に立添て、忘れがたく侍るまゝ、一香一花の手向をもなして、少しく心を慰めんと、唯今墳墓に詣んと、菩提寺へと志し侍る路すがら、浮と一句を設け、これを翁に伺はばやと、閑扉に立もとほり侍りしにこそと云に、桃青もなき母と聞より、早故郷のことのしきりに思はれて、左こそ左こそ、其句は如何作り申されしぞやと、機嫌よく見ゆるに、嵐

雪も膝すりよりて、

皐月音(?)に我簑虫や、母戀し　と聞ゆれば、桃青は頻に感涙をながし、正風の實意誠に斯こそ有べけれ。我もそのかみ先君の遺骨を首にかけて、高野山に上りし時、

父母のしきりに戀し、雉子の聲　と申せしが、かゝる悲しみは親持し人々は知り玉はじとあるに、杉風はもとより嵐闌、其角も、俱にことわりの袂をしぼりけるとかや。されば此吟は瓦辨僧正の、　ほろ〳〵と鳴は山田の雉子の聲、父にやあらん母にやあらん、此歌により申されしにや。

芭蕉翁野曝紀行

翁再度東都に立歸りおはしければ、門下の人々大によろこび、

燒原の舊草を刈分て庵を結び、しばしも心とゞまる詠めにもと、植たりし一株の芭蕉に雨を佗て、

芭蕉野分して、盥に雨を聞夜かな。　此句尤高名にして、芭蕉の翁と稱することゝ、天下一統の號とはなりけるとぞ。

又、

老の名の有とも知らて四十雀　とは、去年天和三年亥の秋の吟なりしが、今年は一しほ老を悔て、

小蝶にもならで秋ふる茱蟲かな　となげかるゝ、心や遙にかよひけん、見まくほしとの家兄の消息に、頭陀の袋の破を綴りて、獨りや出なん、友やあらんと思へる折から、何某知里も所用ありて、生國大和竹の内に登ると云へるを、幸ひのよき友かなと、しきりに思ひ立るゝ、頃は貞享甲子の秋八月ばか

りにや、千里に旅立て路糧をつゝまず、三更月下無何に入と云けん、昔の人の杖にすがりて、江上の破屋を出るほど、風の聲そゞろ寒げなりしかば、首途の吟、

野ざらしを心に風のしむ身かな　と人々を辭して、品川に別れ、六郷の渡りに到りし時、河邊に賈島が

客舍幷州已十霜、歸心日夜懷二咸陽一、無レ端更渡二桑乾一　水一、却望　幷州是故郷

と云ける詩を思ひ出して、

秋十とせ、却て江戸をさす故郷。　知里も路々句を案じて、漸く箱根の山を越る日、

深川や、芭蕉を富士にあづけ行　と申し出けるを、やさしくも句作り申されしものかなと、頓て紀行に書しるして、關越る日は雨の降りければ、山氣雲と騰りて、嶮難空中をたどる

が如くなれば、山中と云る山家に宿をもとめて、所がらなる味噌燒生姜に山嵐の濕をはらひて、明る日も亦曇るに、

霧しぐれ、不二を見ぬ日ぞ面白き。　行き行て駿河の國富士川の渡りを過るまゝに、向を見れば、往來の旅人の立とゞまりて、何やらん見るさまなるが、行きちがひに人々の語るを聞けば、世には難面人も有るものかな、いまだ東西をもわかぬ嬰兒を、心づよくも捨けることよなど云に、いかにさることと仕けるにやと、切れかゝりたる草鞋の緒をむすびつぎ、痛める足を引摺りながら、はしり付てさし覗けば、誠に古き竹巷に、藍染の絹袷の、裾もきれ肩も破れたるを以て、引纏はれながら、三つ計りなる捨子の、哀れげに泣くあり。扨は此子が親たるものの、此川の早瀬にかけて、浮世の波を凌ぐにたへず、此世は

しばらく電光石火の中なるに、風に向へる稲葉の末の、露ばかりの命待間と、心づよくも捨置けん。哀れはかなき小萩がもとの秋の風、今宵や散るらん、翌やしほれんと、袂より畫げの燒飯を取出してあたへらるゝに、いと嬉しげに泣やめば、

猿を聞人、捨子に秋の風いかに。　いかにぞや、汝は父に惡まれたるか、母にうとまれたるか、父は汝をにくむにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、唯これ天にして、汝が性のつたなさを泣けと、念頃に示さるゝを、一人の老僧かたはらに立てこれを見しが、善哉桃青、孤獨を憐むの大慈大悲、須達長者が德にも勝らん、我其義を見てせざる時は、誠に勇みなき者ならん、我此見を拾ひ取て弟子となさんに、何の障ることかあらんと、春より出して、衣の袖に引まとひて立去るを、桃青問て曰、尊

宿我名を呼玉へども、我不明にして尊宿の高名を憶せず、願くは美名をあらはし玉へ。老僧の曰、淨名の不憶なる、佛頂會下に稻妻の句に叅究せしを、早くも忘れられしものよと云捨て、いづくともなく行去りけり。桃青も爰を立退、蒲原より由井へかゝり、薩埵をさして急がるゝ處に、道路に一人の男あり。馬を引て行けるが、桃青に向て曰、旅僧はいづれよりいづれへか通り玉ふぞ。桃青曰、江戸を出て上方を志し侍るなり。男の曰、今夕何方に宿り玉ふや。桃青の曰、我は是乞食行脚の桑門なれば、宿々時の緣に隨て、曾て定れる宿處なし。男の曰、我馬今沖津に歸る、旅僧乘りて行玉はんや。此時桃青足やうやく勞れしかば、即答て曰、貧僧草鞋の料に乏しけれども、賃を卑くして乘せらるゝならば、足を休めんも亦可ならん。男の

曰、旅僧もし乘玉はば、我なんぞ價を論ぜんやと、頓て桃青を馬にかき乘せて急ぐ中に、程なく薩埵の坂にかゝれば、男遙に向うを指さして曰、あれに見え侍る一つ家は、下郎が佗しき住居にて侍るなり、今宵少しき志の侍れば、暫やすらひ、經よみて給はれかしと、引て其家の軒に至る頃は、知里もやうやく追ひ付きけり。

金神償銀救旅人

男は馬に綱鞭打て急ぐほどに、すでに其家の門に至りければ、桃青を馬よりおろし、知里をも俱に内に伴ひ入て、旅客二人を案内し侍るなりと、高聲に呼はれば、應と答て立出る男あり。桃青、知里其人を見れば、たけは六尺にも餘りたらんと見ゆる

大男の、黑面環眼にして、月額の寸髮は栗の毬の如く、左右の頰髭は鐵釘を植たる如きが、身には大縞の廣袖衫を着し、腰には葛藤の朽繩帶を引むすびたり。いかさま山賊の巢籠りとは、一目にもしるき顏色のすさまじさに、知里も桃青も案に相違して、互に目と目を見合せて、唯茫然たる頭の上に、奔雷の雲を破る聲を出して、彼の男を呵て曰、見處もなき痩法師、痩野良どもを取來りて、何條いかめしき客呼はりはと、眼を白く見出すに、男は恐れて一言もなく、馬を引て頓て家の後ろに立去りけり。此時日は早西岫に入果て、そことも知らぬ山中なれば、何くをさしてか逃や出べきと、唯さへ秋の夜嵐に、知里は顏色も青ざめ、魂も天外に飛て、唯打ふるひ居るところを、彼の大男立寄りて、傍に置し行李を已に奪ひ取んとする時、桃青

の曰、我等は四方に乞丐の行脚なれば、包める物にも更に金銀の貯へはなしとは云ども、幸にして命をだにゆるし玉はば、一衣一鉢ことゝく足下にあたへん。男の曰、身に塵一筋をも帶ずして立去らば、我汝等が命を助けんと、已に兩人を赤裸とし、衣類を剝取て納んとするところに、門前に聲有て、八郎宿にありやと云て、入來る侍あり。彼の男忽容を正して、頭領何の宜き有てか來り玉ふと、恐れ入て敬ふ時、彼の侍つくづくと桃青を見て、即ち主に問て曰、此兩人は何人ぞや。男の曰、家僕今日薩埵より取來りたる旅人なり、身に財寶を帶ずと云ども、調度衣類をうばひて、わづかに酒肴の料にあてんとす。侍の曰、我思ふところあり、汝此兩人を放ちかへせ、汝が酒肴の料は我これを惠まんと、懷より一包の銀を出して、

彼男に與れば、男の曰、頭領心ありて此兩人を助け玉ふに、我なんぞ別に頭領の賜を得んやと、即ち衣服を返て兩人に着せしめ、行李を出して與ふれば、侍の曰、汝我が爲に一樽の酒、一盤の肴を調へ來れ、我今宵はこゝに在て酒を酌ん。男の曰、頭領もしこゝに酒を酌玉はば、我喜び大なりと、即ち立て厨帳に入る時、桃青侍に問て曰、足下いかなれば、斯く無緣の旅人を憐み玉ふぞ。侍の曰、貴僧は今日富士川のほとりにて、捨子をあはれみし人に非や。桃青曰、しかり、唯一顆の飯を與へしのみ、何の憐むと云ことかあらん。侍の曰、貴僧發光の慈悲心より、我が子七條の衲衣に包まれて、今生出離の安樂の身となりたり。某は彼の捨子の親にてぞ侍れ、然るに今はからずこゝに來りて、貴僧の難を見る、何ぞ救はで有ん

や。此處はかくれ里と申て、強盗の集るところなり。某も元は武門に在て、弓馬の道にもたづさはりしが、不幸にして浪人となり、落魄極りて、終に此山の賊首となり、今の名をば金神五郎と申て、惡業に日を暮す中に、此頃妻なるもの病を受て、すでに死せんとする時に臨で、嬰兒を某に託していふ、我等夫婦かく零落して、非道の渡世をばなすと云ども、責て此兒は人間にあらしめなん、されども今誰人かこれを諾せん。然らば妾が歿せん後は、此兒を往來の路傍に置て、いかなる人にも授け玉へと、云終て目を閉ぢ侍りぬ。夫故に某今曉兒を懷て富士川の渡口に出、路傍に捨たれども、其行すゑの心もとなく、近邊に徘徊しつゝこれを窺ふところに、貴僧に猿を聞人の一句を授りて、終に禪師の爲に拾はれたり。是誠に速に阿鼻の獄

苦をまぬかれて、たちまちに有頂の天樂を受るにあらずやと、語る中に、主じ早酒肴を携出れば、其れより主客四人梧の爐邊に居並びて、四方山の噺に杯をめぐらして、暫く旅愁をなぐさめける。

俳諧水滸傳卷之十

桃青隱里語ニ金神一

侍又桃青に問て曰、先に禪師貫僧に答て、佛頂會下に稻妻の句に參究せしをと申れしは、如何なることにてか侍るならん、愚俗も得て聞くべしや。桃青曰、誠にさることぞ侍りき、これには長々しき物語の侍るが、秋の夜すがら酒後の雜話に語り申さん。昔唐に禪師あり、祝融山と云る山にこもりて、方丈の草廬をむすび、朝には柴薪をひろひ、夕べには澗水を掬して、定座暫もたゆまず、修禪すること年ありしかば、其德内にみち、其光り世にもれて、萬人渴仰の思ひあれども、一歩も草庵を出ることなければ、一飯の供養も奉るにかたし。折から國中に疾

病流行して、死人やゝ街に盈しを、帝深くうれひ思召て、諸臣を集て議し玉ふに、祝融山の禪師こそ、今天下に其德高ければ、請じて祈禱せしめ玉はば、然るべからんとのことに任せ、急ぎ勅使を祝融山に遣はされ、疫病退散の勅旨有しかば、不日にして疫病消散し、都鄙安穩なりしかば、帝を初め公卿大夫、下庶人に至るまで、禪師の修德のいちじるしさをぞ賞しける。これより帝しきりに禪師を歸依まし〳〵して、何とぞ山を下りて王宮に上れよと、勅使を立らるゝこと數度に及ぶと云ども、禪師あへてがえんぜず。勅使の曰、此度召しに應し玉はずば、違勅の罪をまねき玉はん、普天の下、卒土の中にありて、誰か王命に違することを得んや。禪師曰、我は是釋門の徒、いかんぞ王臣ならんやと、違勅兩度にかさなりしかば、帝忿然として逆鱗あ

り、是此禪師己れが修禪の功に慢じて、人を輕蔑することの何ぞ甚だ過たると。それより深く禪師を恨み思し召て、或時密に宮女を集め玉て仰せらるゝは、祝融の山僧慢心高くして勅に應ぜず、汝らが中一人彼の山に至り、我がために山僧を瞞しなんやと。此に一人の姪女あり、其名を貞蘭香と云り。即ち帝に申て曰、妾が容貌醜しと云ども、願くは勅をうけ玉はりて、山にのぼらん。帝大に悅び玉ひて、手づから玉簪を拔て蘭香に玉ひければ、美人は其れより宮中を出で、其身を處女のすがたに作りて、獨り祝融の峯にわけのぼり、庵近きところにありて、聲を放て大に泣。禪師此時香火を點じて居られしが、山深く頻りに女の泣聲のすれば怪しみ、此山中に何者か來りしと、門を出て見れば、一人の賤女あり、禪師を見て手を合て、山人助け玉

へと泣く。禪師の曰、此ところは女人の來るところにあらず、早く山を下るべしと。女の曰、妾は此山下の樵夫が女にて侍るが、今朝山に木を取て道に迷ひ、此に來て頻に癪聚の病おこりて、一歩もさらに進むこと能はず、山人願くは我命を助け玉へと、悶え苦しめるさま、誠に憐むべきにたへたりしかば、禪師藥をあたへ、水を汲て呑しめ玉ふ中に、俄に雨の降來りしかば、先暫くと庵の門の傍に寄しめ、其身は内に入て戸を引しめ、又座に付て居玉ふところに、日も暮けるが、女の泣聲猶しきりなれば、如何にとも覺束なく、又立出て門外を見るに、女しきりに泣て、腹痛つよく苦しき上に、雨したゝり衣を濡して、全身乾けるところなし、あはれ山人慈悲をたれて、少しき火氣を施し玉へと。禪師こゝに於て病人を庵に入れ、火を燒て寄しめ

玉へば、女悦ぶこと限りなく、火にあたりて身をあたゝめ、又禪師に願て曰、癡聚心下にせまり、呼吸を塞で苦しみ甚し、山人手を伸て我胸を押して玉はば、苦痛速に助りなんと。禪師餘義なく手を以て其肌を撫らるゝ時、女しきりに苦き躰にもてなして、禪師を抱きて身を摺寄しが、恐るべき一點摩觸の心、やうやく染汙の心を生じて、終に雲雨の交りにぞ及びける。其時女禪師に向て懺悔して曰、誠は妾は帝王の宮女なり、禪師の下山し玉はざるを逆鱗ありて、妾をして犯させしめ、禪師を不義に落さんとす。妾今無間の業をなすと云ども、これ皆君命のおもきところなり。禪師あきらかにこれを察て、因果の遁るべからざるを知玉はば、願くは一紙の印を賜りて、早く下山申さんと有に、禪師おどろきたる色もなく、即一偈を書て與へ玉ふ。

釣月耕雲三十歲、愛塵不レ到祝融峯、可レ憐一滴菩提水、終落二紅蓮一葉中一。　佛頂長老此話を大衆に說玉ふ時、野生風と、稻づまに悟らぬ人の魯とさよ　と口ずさみしことの侍りぬと語らるゝに、侍も興に入て、誠業力如二金剛一とは、かくの如きことをこそ申に侍らんとぞ感じける。

蕉翁詠二路傍槿花一

秋の夜の長しと云へども、ほどなく鷄啼き月かたぶけば、家主侍に告て曰、夜明けなば如何あらん、早く月に乘じて旅客を送んは如何。侍の曰、我もとくより左思へり、汝早く馬を引來るべしと。家主内に入て、宅後より二疋の馬を引來れば、侍

桃青に謂て曰、寄生の隱れ里、後日に人の知るあらば、我等悉く全ことかたし、しばらく目を閉て、我が詞に隨玉へと、兩人にふかく頭巾を着せて眼をさゝへ、馬にかき乘て出けるが、水を渡り荆棘の中を通ると覺えて、行こと數里、たちまち馬より兩人をかきおろして何くともなく行去りけり。桃青、知里は頭巾を取て四方を見るに、沖津波の音耳元にきこえて、清見寺のそなたに、有明の月影しらみたる磯山陰に、二人茫然として坐し居たりしは、誠にあやしき事なりけり。桃青つくゞ昨日よりの荒增を思ひつゞくるに、里俗にいへる高釘必打るゝの諺かな、隱遁の身は人にかくれてこそ、一日の榮をも全くせんに、街道に往來して世塵に交ればこそ、かゝる事にも逢ぬる彼長明が漁家に路を問へば、松風空く答へ、岸柳に昔を尋よ。

れば、槿花變じて石有と、海道記に書しも、爰なりけるをとて、矢立の筆とり出して、

道の邊の木槿は馬に喰れけり　と清見寺の門の柱にかき捨て、又引むすぶ旅笠の、日もかさなりて大井川越る日は、終日雨の降ければ、

秋の日の雨、江戸に指折らん、大井川　とは知里が作れる句にぞありける。川を渡れば早遠州の境なりとて、金谷を出ける朝は、二十日あまりの月幽に見えて、山の根ぎはいとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ鷄鳴ならず、杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて、たちまちおどろきければ、

馬に寐て、殘夢月遠し、茶のけぶり。　爰も誠に秦蓋の雨の音は濡ずして耳を洗ひ、商弦の風の響は色なくして身にし

むと、云しところなりけりと、行々句を練り吟を研て、

よしさらば身を浮木にてわたりなん、
天津みそらの中川の水　　とよみし、天龍を渡り、荒井を越えては、

橋本や、あらぬ渡りと聞しにも、
猶過かねつ、松のむら立　　とさこえし、濱名の橋の昔を忍び、二河よりは三河の國と聞もをかしく、御油、赤坂のほど近きには、先の年、

夏の月、御油より出て赤坂や　　と吟ぜしことも有し。又あれに見ゆる鳳來寺にこもりし時は、

夜着一つ、祈り出して旅寐かな　　と佗けるなど、語りつつ行うちに、矢矧の橋の長きも忘れて、尾張路に入、鳴海の里

に千代倉知足は舊知なればと、立寄れしが、他行して宿にあらねば、桑名へ渡り、四日市を過て、伊勢の境に入ては、松葉屋風瀑がもとを尋て、十日ばかりもやすらひ、それより又玄が宅に一夜二夜留り申されしが、その妻なるもののいとかひ〳〵しく、男まさりに物毎まめやかに見えければ、旅の心も安く、彼の日向守が妻女の、自ら髮切て席を設し事など語り出て、

月さびよ、明智が妻の咄せん。　　程なく葉月も名殘なく暮盡て、翌なん長月と云る今日、内外の遙拜を思ひ立て出られける。されば桃青の旅姿は、網代の笠、藜の杖、腰に寸鐵の帶るなく、襟に一つの嚢をかけて、手には十八の珠數を携へられば、僧に屬して神前へは入事を許さず。やうやく日暮る頃、外宮に詣て、靜に渴仰の心を澄すに、一の華表の蔭ほのぐらく、

御燈の光り處ろ〳〵に見えて、又上もなき峯の松風の音、身にしむばかりなれば、古人の心も思ひ出られて、

みそか月なし、千とせの杉を抱く嵐　と法樂の念誦やゝ久しく、其夜は何某の館にぞ宿られける。

墨畫蘭香薫蝶翅

扨も桃青、知里は神路山を出で、朝熊、二見の方を心ざして、圓位上人の舊跡も見ばやと、杖に任せて逍遙せらるゝ所に、あるゝ流れのほとりに、賤の女の多く集りて、何やらん面白げに小歌うたひて、芋を洗ふあり。げにかゝる事は都邊にはなき姿なるをと、杖曳とゞめて、此に道の邊の柳はあらねど、暫しとてこそ立休ひてながめらるゝ中に、一人の女つく〳〵と桃青の姿

を見て、いかにや旅の御僧よ、此流をば西行谷と申て、いにしへよりも里の女の物洗ふ處なればぞ、彼の上人のよみ歌とてをかしき歌をも、口づたへには申し習し侍るものから、かく芋洗ふ己等が業を、立とゞまりて詠め玉ふ旅人の、歌なくて過玉はんやうや有ると、言葉のさがなきは去ることながら、誹しき賤の女にて有けるよと、俳より短冊取出して、

芋洗ふ女、西行ならば歌よまん　と書て、我は名もなき乞食行脚なれば、歌とやらんはよむことも知らず、西行ならば、歌よまんものをと、短冊をあたへて其處を行去り、それより二見の浦に遊びては、扇を打開きて、假りの文臺とし、

硯かとひろふや窪き石の露　と吟じて昔を忍び、爰を過て、何某雷枝を訪玉へば、早くも芋洗の句を聞傳へて、

宿まゐらせん、西行ならば秋の暮と云ひかけるに、
芭蕉と答ふ風の破笠と云て、一夜を明し、此を出て
又の日は、何某嗒山を尋玉へば、
師の櫻、昔し拾はむ木の葉かな といたはるに、
すゝきに霜の髭四十一と佗られけるも、此秋旅の吟
なりしとかや。扨日を過て、或る茶店に立寄けるに、知里は例
の酒好にて、一盤の魚羹を求め、一器の煖酒を乞て獨酌すれば、
桃青は清茶の淡飯に座禪豆を得て、午饌に中てらるゝを、此宿
の主じは婦人なりけるが、桃青に申けるは、旅僧は何國へ御通
りあるにや。桃青答て、東國より伊勢に來りて歸る者なり。婦
人曰、まさしく俳諧の宗匠とこそ見うけ申つれ、わらはが家は
故有て、昔より俳諧の行脚を攝待し侍るなれば、今夕は留め申

すべし。昔浪花の宗匠梅翁宗因とか申せしも、神都參籠の時、
此家にやどり玉ふよし、其時の主じはわらはが母にて、其名を
於鶴と申し侍りしかば、梅翁手づから筆頭に紅をひたして、白
絹に蔦を畫き、
蔦の葉のおつるが恨み、秋の霜 と自畫賛の一幅を殘し
玉へり。妾等かゝる田舍には住侍れども、田上風流の雅人、兼
て其高名を聞ては、大旨其人品を察し侍りぬ。今御僧の有さま
を見ても、大方には推し侍る、其上東國とあれば、まさしく東
武の桃青翁には在さずやと云に、知里傍に是を聞て、先づ手を
拍て其明察を感ずれば、桃青も今は詮方なく、照察恐れ入ると
ありければ、此婦人大によろこび、さればこそ我待所の珍客な
れと、頻に乞て座敷に請じ、水を改ては吠瑠璃を汲み、茶を選

ては綠金芽を煎じ、饗應すること大方ならねば、今宵は計らず此茶店にぞ泊しける。湯を沸て浴を進め、頓て一幅の白紗綾に玉寶の筆硯を備へ來り、知里に入魂して、翁の畫賛を望むこと厚ければ、桃青も其志の切なるを感じて、婦人の呼名を尋ねらるれば、蝶と申侍ると答ふるに、毛錐を嚙で、鳳眼五葉の墨蘭を畫きて、

蘭の香や、蝶の翅にたきものす　　とした、めて、與へられけるとぞ。

披帙兄弟泣白髮

長月の初めには、ひそかに故郷伊賀の上野なる家兄松尾半左衞門の宅に入られしが、北の閨なる萱草も霜枯果て、今は其跡だ

にもなければ、忘んとする昔の事など、皆胸の先に湛へ來りて、かはり行浮世の有さまに、眼とぢらるも亦せつなくて、靜に心をしづめて、家兄の顏色を見るに、髭白く眉皺よりて、さながら亡き父母の俤によくも似たるものかなと思はれて、頻に悲きに、家兄も桃青の淸瘦老衰たる姿を見て、互に云べき言葉もなくて、唯命ありてと而已の一言に、千萬の深き心をこめて、無事の再會を賜ものとは思はれける。夫より菩提所愛染院に詣て、父母の墳墓を祭り、或日は土芳、半殘に會し、或夜は猿雖、良品と語りて、しばらく舊友の再會をよろこぶと云ども、忍びたる里歸りなれば、日頃止らんも憚り多く、且は同行の煩と、やがてこゝを立出んとせらるゝの日、半左衞門一つの守袋を取出して、桃青に語て曰、宿昔靑雲の志、蹉跎たり白髮の年、

誰か知明鏡の裏、形影自相憐とは、古人も已に歎きしが、汝も我も白髪を自ら憐まんには、明鏡を照しても亦見るべし、これこそ世には二つなき父母の白髪なりとて、浦島が子の玉手箱、あけて千筋の霜をがむに、もとより桃青は忠孝に厚き心より、愁慕の涙胸にみちて、面を擧ることだにあたはず、暫くよゝと打泣て、

手にとらば消ん、涙ぞ熱き、秋の霜　とは纔に萬分が一をや述られけん。泣々上野を立出て、其れより大和竹の内に到り、油屋喜左衛門とかやは、彼知里か舊里なれば、日頃とゝまり足を休、所がらなる秋の業を見て、

綿弓や、琵琶になぐさむ竹のおく。　此句今に持つたへて、彼の油屋が家寶とはなしけるとぞ。これより翁は知里に別

れて、獨り竹杖を心の友とし、二上や當麻の寺に詣ては、庭上の松に佛縁の幸ひを尊び、彼王播が惠照寺に遊で題せる、樹老無レ花僧白頭といへるを思ひかへして、

僧朝貌、　幾死にかへる法の松。

それより吉野の奥にたどり、つら〳〵此山の景色を見るに、白雲峯に重り、烟雨谷を埋て、山賤の家居處々に小さく、西に木を伐る音東にひゞき、院々の鐘の聲は心の底にこたへたり。誠や昔より此山に入て、浮世を忘れたる人々、多くは詩に遁れ歌に隱る。いでや唐土の廬山と云んも、亦むべならずやと、徘徊すでに日暮に及びしかば、或る俗坊に一夜の宿をかりて、

礎打て我に聞せよや、坊が妻　と、爐邊の火影に丸寐して、河水の音を枕の下に聞けば、正平の帝の御製も思ひ出られ

て、更行夜嵐も物悲しき折から、其さまたをやかなる上臈の、髪うるはしく搔上たるが、しとやかに出來りて、桃青の傍に立ち、

吉野山、花の跡とふ人はあれど、秋の惣の名さへ知られぬと、打吟じたる顏を見れば、容貌云ばかりなき官女と見えたり。桃青不思議の思ひをなして、あな訝かし、かゝる山家にかゝる上臈のおはせんこと、そも誰人にて在ますにやと、容を正して敬へば、上臈莞爾と打笑ひて、さな仕玉ひそ、旅僧に語り聞えんことの有てこそ來り侍れ。昔此山に後醍醐の帝の籠らせ玉ひし時、あはれなること、をかしきこと、珍らかなることどものあまた有しを、何某の局が書あつめて、宇治物語の例に倣ひて、吉野拾遺と名づけたりしが、其書にも書さもらしたる、悲しき物語の侍るなるを、旅の勞れをなぐさめに御物語り

申なんと、かくは來り侍るなり、秋の夜のつれ〴〵に、夢驚かで聞玉へかし。昔南帝の御時に、陸奥の惣と云る半女の有しが、如何なる時の折か有けん、かしこくも假初に一夜の御情けを受參らせしが、包むとすれど糸すゝき、いつしか穗に出そめて、此事の漏聞えければ、傍なる人々の妬みつよく、兎につけ角につけ、さかしらのかさなりしより、終に罪に落入て、此山の麓なる 聽 と云る里に押こめ置て、荒き武士をして守らせたれば、二たび天顏を拜むことも思ひたえて、夜となく晝となく、なげきくらせしほどに、正平の春の雲隱れに、帝失させ玉ひしと聞て、有にもあられず、夜ふけ人の靜りしを伺ひ、戸を押やぶりしのび出て、夜にまぎれ山にのぼり、陵の玉垣に取すがりて、血の涙をながし、終に泣死に死けるを、人々憐みて、

俳諧水滸傳

あたり近き松が根につきこめたりしが、ほどなく其跡より葱と云る草のおひ出て、やさしき綠りの葉を茂り、根をつたひて、陵の方に生ひ登れる有さまは、さながら昔を葱ぶ草の名をだに、今は知る人もなくて、手歷る妄執の哀なる跡を、とひ玉へやと見えしが、夢さめて吉水院の鐘の音に、夜はほの〳〵と明ぬれば、野邊より山へ入る鹿の、跡を追行旅草鞋、藏王堂より子守、勝手の明神へ詣て、猿引坂、雲井山、愛染堂より奥の方に分け入、西上人の草の庵をたづねんと、奥の院より右の方へ、二町ばかり分け入るほどに、朝露の所せきに降て、樵者の通ふ道のみ、纒に嶮しき谷をへだてたるは、いと尊き閑地なりけるに、彼とく〳〵の清水はと見れば、幽なる岩間より雫をつたへて落る水の、清らかなるこそ、昔にかはらぬとは思はれて、

露とく〳〵、心みに浮世すゝがばや。　山を昇り坂を下るほどに、秋の日のすでに斜なれば、名ある所々をも見殘して、先後醍醐帝の御廟をと志して、山を下りに右の方の谷間にわけ入つゝ、見たてまつれば、古き玉垣の朽殘りたる中に、一堆の土の跡もかすかに、松杉の生亂れて、苔厚く露しげきを、葱草やさしく這ひまとひたるさま迄、哀れさ云ふばかりなかりければ、

御廟年を經て、葱は何を忍ぶ草。　彼の帝の昔の玉の床を思ひ、葱が哀なる迷魂をなぐさめて、日の暮る頃やうやく山を下られけるとぞ。

芭蕉入濃宿木因

翁は其後山跡より山背を歴て、淡海路を過ぎ、美濃の國の境に入て、位増山を越、常盤が墓を尋ては、

義朝の心に似たり、秋の風。　不破の關を過る時は、

秋風や、藪も畑も不破の關。　大垣にては木因が宿を主

として、

隱れ家や、月と菊とに田三段。

木因が喜ぶこと斜なら

ず、誠に一休禪師の、　山居とは上田三反、味噌八斗、小者一

人に、水のよさ處と云しには、月と菊の風流は缺けるものをと

感じて、晝夜語り明して倦ざりしが、九月も盡る日なりければ、

誠や江戸を旅立ける時は、野ざらしを心に思て出けるがと、風

の芭蕉の破も盡ぬ身を觀じて、

死もせぬ旅寐の果や、秋の暮　と吟じて、如行が亭に移。

んとて、此所に出給へば、近きほどなれども、舟にて送り申さ

んとて、木因も同じく舟にのりて、

秋の暮、行先々の笘やかな　と木因が吟ずるに、

荻に寐やうか、萩に寐やうか　とありて、程なく如行

がもとに入玉へば、如行も大に悦びて、

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申す。　其夜は十月朔日なりけ

れども、いと風荒てすさまじさに、貧家の誠を白地に、心の實

を言出せるを、翁も甚だ感じ玉て、此道今人棄て如ㇾ土と笑ひ

ながら、

古人斯樣の夜の木殺風　と附て、しばらく此に舍られ

ける中、斜嶺、荆口、千川、恕風など往來してなぐさむるほど

に、斜嶺亭にては、軒近き伊吹山を見て、

其のまゝに月もたのまじ、伊吹山　と花にもよらず雪にもよらず、孤山の徳をほめ、千川亭にては、折々に伊吹を見てや、冬ごもり。　程ありて如行が宿を辭して、大垣を立出、養老の瀧を尋ね、船に便ありて、桑名の方へぞ下られける。

いかめしき音やあられの檜木笠。　紛を釋き俗を利するの吟、並に皆佳妙なるものから、こなたかなたのしるべ多く、鄙の長途をいたはる人々、名を乞ひ句を忍ぶこと安からずぞきこへし。されば此大垣の木因と云るは、蕉翁舊識の俳士にて、其氣象群を出て頴かりければ、翁もつねに稱美ありける。或時木因は出て京に遊び、翁は東武に在しが、書を木因がもとに寄て曰、

當時或人附句あり、江戸中に聞人なし、予も此を知らず、貴丈聞、定て密に告よ、東武に弘めて、予が手柄とせん、其附句、

蒜の籬に鳶をながめて　と云る前句に、
鳶の居る花の賤家とよめりけり。　木因此を見て、則返書を贈る、其書に曰、

或人の附句、貴丈聞定めず、愚に評すべきよし、予猶考に落ず、徒に此を返す。予又在京中に古筆跡一枚を得たり、京中に定むる人なし、予も此を知らず、貴丈の聞定を待て、花洛に弘めて、予が手柄とせん、其古筆跡、

榮園集卷七俳諧歌に、
蒜の籬に鳶の居るをながめ侍りて、
鳶の居る花の賤屋の朝もよひ、

木を割る斧の音ぞ聞ゆる。　蕉翁此書を見て大に喜び、さればこそ株河の翁は予が思ふところに違はず、此句江戸に聞人無とは僞り、彼翁が心を謀見んが爲なるに、誠に此道知たる人かなとて、即自讃の詞を作て曰、

古往達人花に櫻を附るに、同意を嫌ふを本意と云り。增て鳶に鳶を附て一物別意を附分け、當時未來の作者に此句を似せさせず、古往今來未來一句の格とす。何れの時か秋風來て、芭蕉の薄葉もろく破し迄の一句、一生是のみ也と書うちに、早鼻高くをごめき、肩のあたり羽たゝさする心地こそすれ。右往復の書、木因自筆にて一紙にうつして、今猶好事の者此を秘して、江戸に有とぞ。桑名に着ては本當寺、古益亭に宿りて、

冬牡丹、千鳥よ雪のほとゝぎす。　老の枕の寐られぬま

まに、朝とく此を出て、濱の地藏と云るに參籠して、

曙や、白魚白きこと一寸、　此句初めは雪薄しとも申されしとかや。熱田に渡りて、

遊び來ぬ、鰒釣かねて七里迄。　熱田の神祠は大に破れて、築地は倒れ、鳥居は朽たるに、彼こに繩をはりては小社の跡をしるし、此に石を置ては其神と札を立れば、蓬忘心の儘に生たるぞ、中々に目出度宮造りよりも、心留りて尊く思はれければ、再拜し奉りて、

忘さへ枯て餅買ふ舍りかな。　夫より濱の方へ出て、此海に草鞋を捨ん、笠時雨。　景清が屋敷近き桐葉かも

とに頭陀を解て、日頃留められ申されしが、木枯の格子を明て、は、雪中に往來せる品物の辛苦を憐みて、

馬をさへ詠る雪の朝たかな。　或日主じの桐葉を始め、東藤、工山など催して、師走の海の景色見せ申さんと、小船に一種一肴を携へて漕出ける時は、浪の音をかなしみ、鳥の聲を憐みて、

海暮て、鴨の聲ほのかに白し、　翁
串に鯨を炙る盃、　桐葉
二百年、我此山に斧とりて、　東藤
樫の種蒔秋は來にけり。　工山

以下三十二句此に略す。此一卷に菫草の卷、榎の花の卷を合せて、後世熱田三歌仙とは申けり。

冬日尾張五歌仙

爰に此里に一箇の俳星あり、其名を檀木堂荷兮と號す。其徒皆よく一風を謠うて、常に賢を酌み聖をたのしむの席、必其面をつらねざること無ものの、野水、重五、杜國の三輩、正平、羽笠、亦時々に來往す。此日三四輩例の如く荷兮が庵に集て、火爐を擁し熟茗を啜て談話せる折から、何やらん低聲に吟じて、門を過るものあり。諸子耳を欹てこれを聞に、笠は長途の雨にほころび、紙衣は泊り〳〵の嵐にもめたり、侘つくしたる侘人、我さへ哀に覺えける。昔狂歌の才子此國にたどりしことを、不圖おもひ出てと吟じて、

狂句木枯風の身は竹齋に似たるかな　と謠を、荷兮手を拍て、あなめづらか、かゝる妙句を吟ずるはとおどろけば、野水はたちまち躍り上り、趨て柴門の外に出、いかに旅客しばら

く待給へ、一言を申んとて、

誰そやとはしる笠の山茶花　と吟じ掛れば、其時この人竹笠をとりて振かへり、野水に問て曰、足下又誰人なれば、かく言葉に寒梅の匂ひを飛し給ふぞ。野水曰、凩の一句におどろかされて、思はず門外に出て客を止む、何ぞ言葉に花あらんや。問答はしばらくさしおき、先こなたへ入玉へと、引て小庭に入しむれば、早小童盥盤に溫湯を備へ來て、足を清むるを待て、茶室に伴ひつゝ、爐火をあらため綠芽を煎じて、勞を慰することと大方ならず、安坐を促し一睡をすゝめての後、家主室に入て客に接す。桃青坐をあらため此を見らるゝに、其人身には濃藍の服を着け、細縞の絹袴筋整く、鷹眼高眉、意氣殆ど衆を服するの容あり。則ち坐して謹て禮を施て曰、先生あ

やしみ給ふことなかれ、小子は寒廬の主檀木堂荷兮なり、賢くも白雲一雙の行を留め得て、雀踊にあまると、慇懃の禮をつくせば、桃青曰、我れ些々たる一小乞丐、幸に風士の惠に遇ふ、主又怪むことなかれ、愚老は東武深川の隱士芭蕉庵桃青と、名調の禮を施さるれば、野水も再び服をあらためて出來り、重五、杜國、正平等皆々席に入て禮をなし、誠に先生の雷名小子等が耳にとゞろくこと久し、今日何の幸有てか、高歩を辱す、昨夜の燈花の瑞、今朝の喜鵲の躁實に應ありと、悅ことなならず、各名を通じ讓を厚して、賓主座定りければ、荷兮問て曰、蕉翁には何れより何れへか通り玉ひて、今日此里をば過り玉ふにや。桃青云、貧道此秋深川を出て、伊賀の故郷に家兄をたづね、大和路より伊勢、美濃に廻りて、再び江戸に下向

せんと、桑名より此地に渡り、しばらく桐葉子が亭にありて、今日こゝに來り侍ると、所々の吟行など物語りあれば、各句毎に金玉の聲を感じ、風談やゝ時を移せば、極月も早半ば過なから、未だ寒天の日影短く、忽昏鐘の暮を告て、棲鴉の塒を爭ふ聲頻りなれど、今宵は旅情をやしなひ給へかしと、皆々辭て席を退き、褥をまうけ枕を備て、今夜は檀木の窓下に旅寐の夢をぞ結ばれける。明れば野水、杜國なんど早朝より入來り、文毫を直し、懐紙を備て、早俳筵を開んことを促す。荷兮曰、蕉翁昨日の高吟一唱三歎、殊に彼の竹齋老人が、木殺風のあとの梢に似たるかな、老行く身には花も香もなしと云し狂歌にたより、狂句の二字を餘して、其意氣尤高く承る、願くは請て卷首とせん。桃青曰、野吟焉ぞ稱するに足らん、去り

ながら若歌仙の連句をも催し玉はば、幸に野水子の脇あれば、是に家主の第三あるべしとて、終に荷兮第三に究り、有明の主水に酒屋造らせて　と、正平を執筆として、懐紙にうつせば、

頭のつゆを振ふ赤馬、　重五
朝鮮のほそり芒の匂なき、　杜國
日のちり〳〵に野に米を刈。　執筆正平

夫より五人長句、短句と吟じて、三十六句一卷となれば、翌日は野水が句の中にて、

初雪の今年も袴着てかへる　と云を卷頭として、杜國、芭蕉、荷兮、重五、又正平を執筆として、荷兮が擧げ句に二折滿れば、又の日は杜國が、

包みかねて、月とり落す霽かな　と云るを首として、重五、野水、芭蕉、荷兮、執筆は同く正平也。其次の席は重五發句、

炭賣のおのが妻こそ黒からめ。　今日は正平にかはりて羽笠筆をとる。六人六句に一卷成て、已に四卷の歌仙となれば、今一卷は荷兮が句をとあるに、數句言ひ出せる中にて、

霜月や、鶴のつく〳〵並び居て　と云に定りて、

冬の朝日のあはれなりけり　と翁の脇ありしより、一卷はこびて、已に名殘の裏移りになれば、例の寂しく、

元政の草の袂も破ぬべし　と侘らるれば、

伏見、木幡の鐘花をうつ　と荷兮が慰めに、男猫と雪掃の二句を置て、今は名殘の長句に至れば、初卷に狂句木凧の

身とありしを結びて、

水干に秀句の聖若やかに　と野水が作を受次て、

山茶花句ふ笠の凧　とは、寂初の脇句の詞をかりて、

發句の凧を一卷の結字に用ひし、五歌仙を一卷の働とぞ聞えける。されば此冬の朝日の脇、意味の深長其感限なしとて、此五歌仙を名けて、冬の日の俳諧とは呼けるとぞ。

15/12/36

俳諧水滸傳（はいかいすいこでん）

終（おはり）

袖珍名著文庫
全部百冊
▲毎篇紙數二百頁▼並製正價一冊金拾錢●六冊金壹円拾四錢●拾二冊金貳円廿貳錢●廿五冊金四円六拾錢●五拾冊金九円●全部百冊金拾七円五拾錢●上製一冊ニ付金八錢增シ●

俳諧水滸傳 奥付
上製定價金廿八錢
並製定價金貳拾錢

明治廿六年九月廿五日印刷
明治廿六年九月廿八日發行

校訂者 藤岡作太郎
東京市神田區表神保町九番地
發行者 合資會社 富山房
同所
代表者 合資會社富山房社長 坂本嘉治馬
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 森潤二
印刷所 株式會社 秀英舍第一工場

不許複製

袖珍名著文庫

全部一百冊定價上製一冊金廿八錢並製一冊廿錢郵稅各六錢

校訂編輯擔任

饗庭篁村先生　幸田露伴先生　芳賀矢一先生　宮崎三味先生　上田萬年先生　關根正直先生　藤岡作太郎先生　尾崎紅葉先生（五十音順）

目次

卷の一　蝶夢芭蕉翁絵詞傳……幸田露伴先生校訂
卷の二　近松淨瑠璃三種……饗庭篁村先生校訂　三月發行
卷の三　秋成雨月物語……芳賀矢一先生校訂
卷の四　曲山人娯節川……尾崎紅葉先生校訂　四月發行
卷の五　今昔物語選……藤岡作太郎先生校訂　五月發行
卷の六　江戸物語……關根正直先生校訂　六月發行
卷の七　狂言二十番……芳賀矢一先生校訂　七月發行
卷の八　山家集……幸田露伴先生校訂
卷の九　風流志道軒傳及假名文選……饗庭篁村先生校訂　八月發行
卷の十　春花五大力……宮崎三味先生校訂
卷の十一　俳諧水滸傳……藤岡作太郎先生校訂
卷の十二　よものあか……上田萬年先生校訂　九月發行

（以下毎月二冊宛發行）

一、袖珍名著文庫は、我が邦一般の家庭に、健全にして多趣味なる文學的讀本を供給し、娯樂に由つて讀書の嗜好を養ひ、人生の慰安を與へ、進んでは現今の沒趣味なる社會の風潮を一變せんことを期す。

二、袖珍名著文庫は、莊重、優美、滑稽の三方面より近文古文を問はず散文韻文を論ぜず、平易にして優雅なる各時代各種類の文學を網羅せり。而もその校訂は正確嚴密皆正文として十分の責任あるもの也。

94
112

94
112

087308-000-6

94-112

俳諧水滸伝

遲月庵　空阿／著

M36
DBE-0570